2026 中国四国土を考える会 総会・研修会を開催しました

2026年4月10日

勝部会長

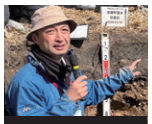
重永農産 作田さん

中国四国土を考える会は、3月16日・17日の2日間にわたり、広島県世羅町にて総会・研修会を開催しました。

研修は、昨年収量差のあった水田ほ場2か所での「土壌断面調査」（農研機構 農業環境研究部門 前島勇治氏／若林正吉氏）と、講義「土壌の力を引き出すために」（帯広畜産大学 谷昌幸教授）の二本立てで行われました。

勝部会長の挨拶で『現在、全国各地で行われている土壌断面調査は、中国四国土を考える会 前会長で昨年末に逝去された奥山孝明さんが「穴を掘って勉強をしよう」という呼びかけから始まった』と伝えられ、今回の研修が参加者の皆様にとって有意義な時間となれば、と述べられました。

土壌断面調査は、重永農産のほ場にて実施。比較対象となる2つのほ場は約100mほどしか離れていないものの、収量には差が見られ、事前の土壌診断でも化学性に大きな違いは確認されていませんでした。しかし、約150cmの穴を掘ってみると土壌断面の違いは一目瞭然で、実際に穴を掘って確認することの大切さを実感する機会となりました。重永農産の作田さんからお話を聞いた基盤整備の経緯や作業体系などの内容を踏まえ、前島氏・若林氏より収量差が生じた要因の考察を交えながら、各土壌断面の解説が行われました。

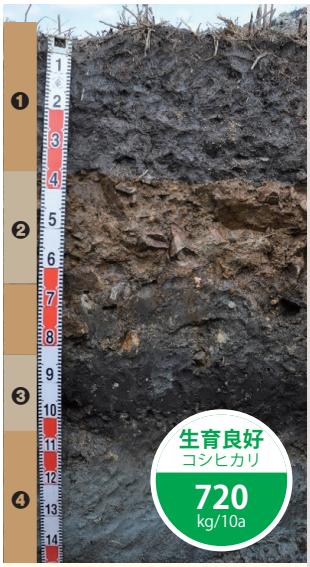

前島氏

若林氏

その後、ホテルに移動して行われた谷教授による講義では、ほ場ごとに適した土壌改良や施肥の重要性についてのお話がありました。また、土壌の性質を理解するための「土壌診断表」の見方についての解説があり、物理性・化学性の両面から土壌への理解を深める研修会となりました。

谷教授

研修会終了後には懇親会が行われ、参加者同士の交流も深まりました。翌日には総会が開催され、充実した内容の2日間となりました。



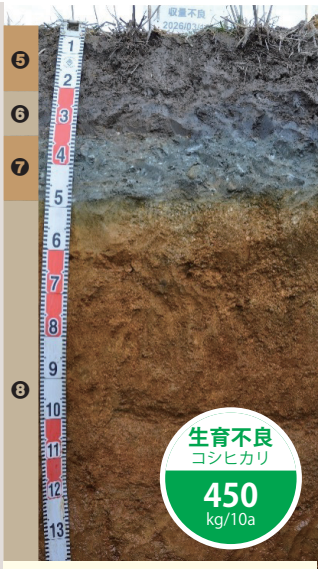
乾田直播栽培 × プラウ

～前島先生の断面ひとこちコメント～

広島県世羅郡世羅町重永　重永農産

中国山地の中山間地（標高350m）の谷底平野に位置し、花崗岩が風化した“真砂（まさ）”を主な母材とした沖積土です。両ほ場は100m程度しか離れていませんが、令和7年度水稲収量に大きな差がありました。生育良好の土壌断面（左）は作土層が約35cmと厚く(❶)、作土層のうち一部（深さ20－35cm）は酸欠状態の土層（グライ層）を示しました。作土層直下には1990年代の基盤整備により、大小様々な角礫からなる礫層が厚さ30cm出現し(❷)、さらに深さ83-104cmは黒色の泥炭層(❸)、その下には地下水によって形成された鮮やかな青灰色の砂質なグライ層へと続いていました(❹)。このほ場は山間部の谷筋下部に位置し、かつてはヨシなどの湿生植物が繁茂した後背湿地だったと考えられます。常に水はけが悪く、地盤が緩いため、地耐力を確保するために基盤整備時に表土扱いと他所から大量の礫土を運び入れ、客土を行ったと推察されます。

一方、生育不良の土壌断面（右）では、厚さ20cmの作土層(❺)直下に厚さ10cmのグライ層(❻)、その直下に固結した青灰色の砂礫質のグライ層が続き(❼)、深さ48cm以深は橙色の真砂が140cmまで続いていました(❽)。このほ場は基盤整備時に表土扱いを行うとともに、水持ちを維持するため、下層土の表面を重機で過度に転圧したと考えられます。そのため、作土層直下にち密な不透水層が形成され、灌漑水の鉛直方向への浸透が妨げられ、常時酸欠状態の土層が形成されたと考えられます。以上のように、土壌断面調査により土層の構成が明らかに異なることがわかりました。一方は礫層の存在により、灌漑水の停滞が緩和され、異常還元を引き起こすことはませんが、もう一方は固結したグライ層により根域が制限されるため、サブソイラなどを用いて心土破砕を徐々に行うと良いでしょう。



慣行移植 × スタブルカルチ

中四国土を考える会 事務局：スガノ農機株式会社 九州中四国支店　福岡県大野城市笠川2-9-23　TEL. 092-558-1680　FAX. 092-558-1690